

ジャファル・ギヤシ
建築学博士
アゼルバイジャン科学アカデミー委員

アゼルバイジャン の中世期の建築術

青モスク、1465年、タブリーズ



アゼルバイジャンに属した偉大な芸術作品が、科学文献では殆どの場合にはイスラム、あるいはペルシアのものとして認識されてきている。アゼルバイジャン芸術史はただ民族社会的な見解からだけでなく、他の文化への影響力及び独自性、そして発展レベルの見解から別個に研究する

アゼルバイジャンは、イスラム東洋では比較的に小さい面積を占めている。アゼルバイジャンの様々な歴史時代を通して様々の帝国の中に入っていたという事実は、アゼルバイジャンの文化や芸術の分野での業績をめぐる研究活動を行うのに妨害した。

価値がある。ここ数年にアゼルバイジャン人の研究者がこの方向に向けて幾つかの研究を行ったにせよ、残念柄も、それらの結果を国際的なレベルまで達するのにまで成功できずである。

中世期の文学、芸術、音楽、絨毯製造、そして他の芸術部門でのアゼルバイジャン文化の業績が世界的な役割を果たしていた。それらと並び、中世期アゼルバイジャンの建築者は、世界の都市建設や建築術には重要な貢献をした。

中世期のアゼルバイジャンの都市建設の発展の絶頂時が

イリハニド朝の統治時代となる。その時代にいくつかの都市（マラガ、タブリーズ、サルマス、ウチャン、バクー、デルベンド）の復旧及び拡張が行われ、また新しい町（グトゥルッグ・バリグ、マフムダバド、スルタナバド、スルタニエ）も作られる。タブリーズが迅速に拡張・発展するとともに近東の中心地になっていく。1403年にスペイン使者のクラヴィホ史がタブー理図に20万世帯（約100万人）が居住していると指摘している。当時、タブリーズはヨーロッパとアジアを結び付ける貿易センターであった。14世

ソルターニーエのオルジェイトゥ廟、1305年－1313年



紀にタブリーズを訪れていたヨーロッパの旅行者は、「そこは世界一豊かで大きい都市である」と述べる。その一人は、オドルトコ・ポルデオネ氏が「キリスト教徒がその都市からのハン収入がフランス王様の全国から得る収入より大きい」と記している。

ガザン・ハンが行った都市建設事業の結果として、タブリーズが巨大な首都なりの

全ての機能を得る本格的な市に変わった。その時代に、6つ大事な要塞の各ゲートの前に貿易地ができた。それらは互いとも、中央市場とも結んでいた。イスラム圏におけるタブリーズの著しい影響力がラシディヤ科学教育センター建設に原因した。幾つかの行政・貿易の機能を担ったガザニス町がタブリーズの外の仲間都市であった。

イリハニド朝統治のタブリーズは設計空間的な完成性、そして機能的な決定の適合性の観点からみれば、中世期の都市建築のごく稀な一例であった。高い生産率、貨幣経済の発展、改善された水供給システム、大規模な経済関係と都市開発のためにタブリーズは、アラブ帝国の魅力的な都市を追い越したのである。

都市の全領域内に大きな



建築混合物の効果的な分配がタブリーズの空間構成に機能的なバランスと順序さを与えていた。14世紀初頭にタブリーズは多機能の構造計画を持ち、その見解からみれば、現代の単一中央的・多数中央的な都市に等しかった。

イリハニド朝統治時代に得た都市建設のタブリーズ経験はその後隣国まで普及した。トルコの研究者、H. Z. ウルケン氏がその経験がエミル・ティムル及びシャー・アッバスの時代に「理想とプログラム」を与えたのである、と指摘した。

国際規模でのアゼルバイジャン都市建設術の最も重要な貢献として町の中央広場が挙げられる。タブリーズの機能的な多種多様さが多機能の中央広場の基盤となった。その広場は、主要な社会イベントやビジネス、軍事パレードや演習、豪華な祭りや宗教儀式、公演、スポーツイベントを行うのに適した。イリハニ

ド朝の時に起工されたサヒババド（サヒブリアムル）の広場が発展し、サファヴィー朝の時代に都市の本格的な中心地になってきた。広大な長方形の広場を中心にタブリーズの行政・宗教・文化・貿易のセンターがあった。その後、サファヴィー朝の統治者らがこの都市建設システムを将来の首都、カズビンとイスファハンでも生かした。イスファハン市のメイダン・シャー広場だけがありのままに今日に至った。

アゼルバイジャンの建築者は近東建築類型の発展に偉大な功績を残した。それは、アリシャーのモスク、タブリーズの青モスクのような宗教的な建造物に影響を及ぼした。リハニド朝の時代にアゼルバイジャンでは針型の覆われた天井が大きい祈拝堂のモスク類が形成される。中でもハジ・アリシャー・タブリーズが1311-1324年に建設したアリシャー・モスクが典型的な例

であろう。祈拝堂の総面積が約2000平方メートル、直径30メートルの天井で覆われていた。本建設物の安定度が厚さ10,4メートルからなる横の壁によって保障されていた。角形のミナレットがある素晴らしいアイバンを主なファサードに変えるのが建築的な新技術であった。アリシャー・モスクはイスラム界の最大な宗教的建設物の一つであった。ティムリド朝が中央アジア、アフガニスタン、イランで建設アイバン類のモスクの原型となり、その影響がエジプトまでさえ広がったのである。現在、その小さな部分である「アルク・カラス」（アルク要塞）がタブリーズの象徴となってきた。

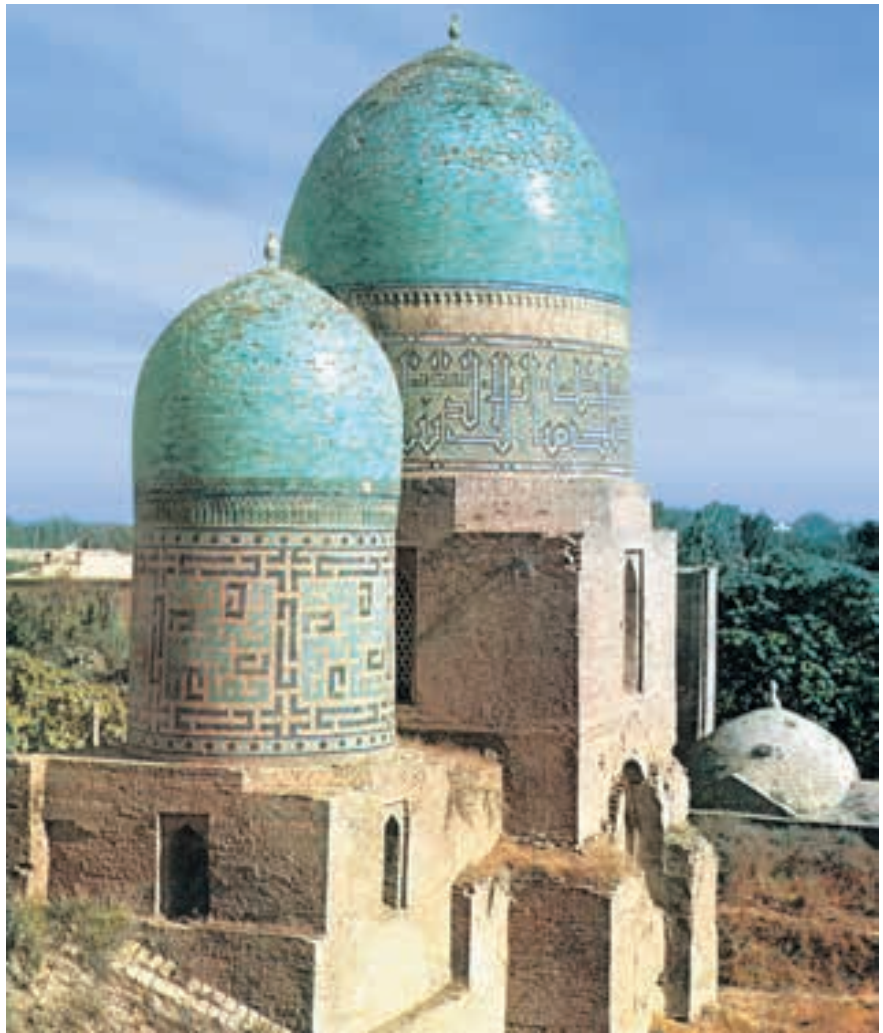
アリシャー・モスクと違って、ハジ・アリ・クチャチ建築者が1465年に作ったタブリーズの青モスクが中央円天井構成であった。直径16,5メートルの大きなクーポルに覆われた中央正方形の祈拝堂が三



シャーヒ・ジンダ、カズィ・ザデ・ルミ陵、15世紀、サマルカンド

つの方向から廊下に囲まれていた。4つ目の方向（南）に小さいホールがある。技術建設的・機能的な見解からすれば、このような構成は青モスクに完璧感を与える。モスクの空間的な容積の決定も、ダイナミックであった。大中央クーポルを囲む小さな天井、大事なファサードの隅に建てられた2本の魅力的なミナレットもこのモスクの表現力と華麗さを強調していた。

アゼルバイジャンでのセリジユク朝のモスクの変化の結果として、青モスクが世界建築遺産の中で大切な役割を果たしている。このモスクは、他の幾つかのモスクの建設にあたって原型となった。例を挙げてみると、ムガル朝がインドで建てたジュミヤ・モスク、イラクでのシーア派のモスク・御陵、そしてイランやテュルケスタンでの何軒のモスクもタブリーズの青モスクの影響を受けたという。





ある人に関する記念が永遠に残るために建設される塔の陵が世界建築術の中でとてもいい例であり、セリジユク朝時代の建築的な現象となった。このような御陵は主にオグズ・テュルク族が居住していたところ（アナドル、アゼルバイジャン、ホラサン）で見あたる。御陵の2層の上部が円筒、立方体、プリズムの形で作られ、2層のクーポルで覆われていた。アゼルバイジャンの建築者は、陵の各3種類の建設にあたり、高いレベルに達した。

ナヒチェバンでのモミネ・ハトゥン御陵（アジェミ建築者が1186年に建てた）がプリズム型体の塔の陵の最良例であると言える。ナヒチェバンの立派なところで建てられたこの御陵は、まず大きいサイ

ズ（高さ35メートル）および複雑な設計で目立つ。0面体のモミネ・ハトゥンの陵塔が完璧な支柱とテクトニックな構造のシステムを持っている。御陵の棟が完全に柄や題銘的な模様で彫刻された。アジェミ・ナヒチェバニ氏がプリズム型体の陵塔の発展に大きな役割を果たしたように、アフメド・アリ・ハフィズ・ナヒチェバニ建築者が円筒型のクーポルの陵塔の発展において重要な人物である。円筒型のクーポルの陵塔に最も明らかな例として、カラバフラル村でアフメド・ナヒチェバニ氏が建てたクディ・ハトゥン陵であろう。

また、ナヒチェバンの建築者らが建てた伝統的な型の陵塔の貴重な建設物の一つとして、ジュリュファ内（ナヒチ

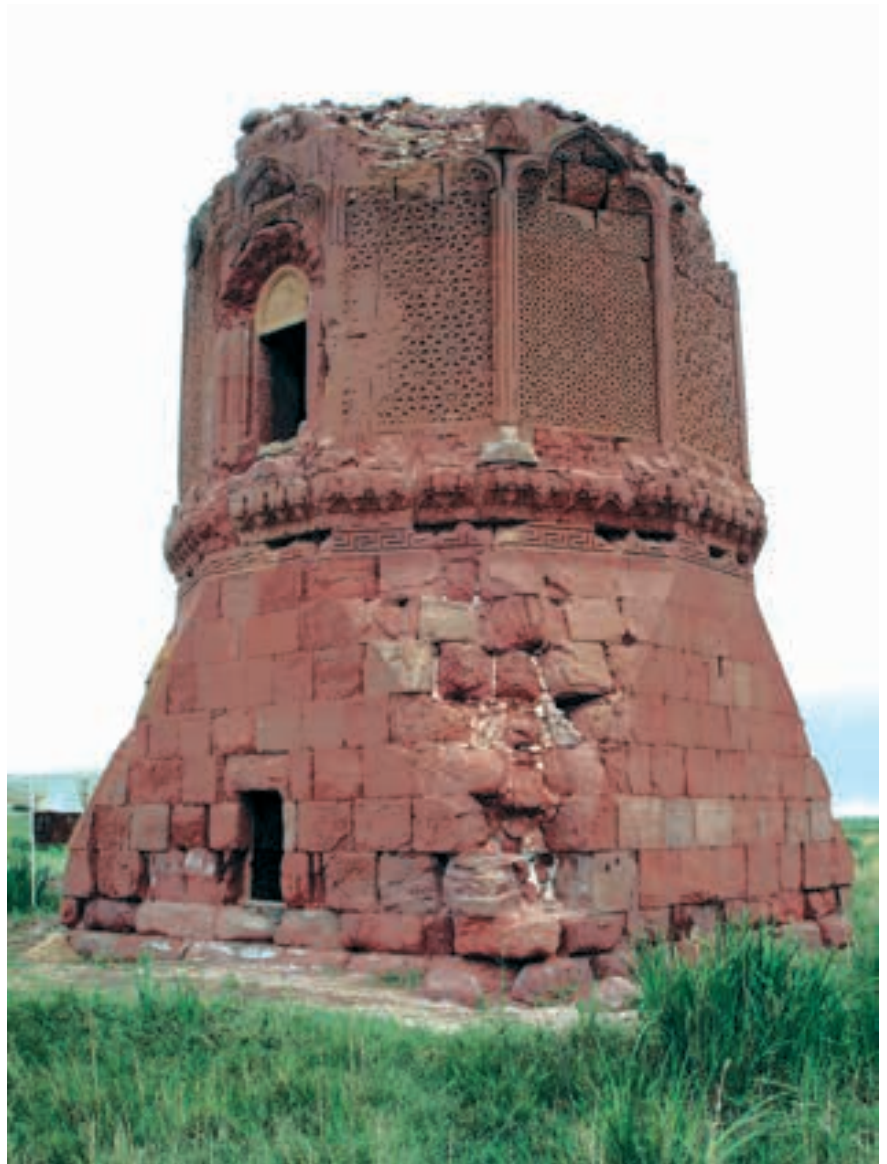
ェバン）にあるギュリスタン御陵でもある。その特徴は、表面に出された塚穴で、2層型の塔である。この様な類型が小アジア、現在トルコで広く普及されている。ギュリスタン陵が正方形の基礎から十二面体に変転し、その形、模様の魅力的さ、スタイルの完成性によってアナトリアのモスクを越える。

塔のある御陵は主にピラミッド型か円錐型のクーポルで覆われていた。円錐型のクーポルのある陵がアゼルバイジャンで特別な発展の道を行ってきている。中でも、最も壮大で有名なのはガザン・ハンとオルジャイトウ・ハンの陵である。シャンブ・ガザン慈善複合体の主な建物であるガザン・ハン陵（アリシャー・タブリージ建築者、1297年）

は、現在のところは完全に壊れている。しかしながら、遺された史料をみたら、その建築構造を想像できるだろう。その偉大な構造はギュグガンでのグンバディ・キャブクと比較できる。壮大で完璧な建築構造があるガザン・ハン陵がアゼルバイジャンのみならず、ティムリド朝の陵建築スタイルにも影響を与えたのである。

オルジャイトウ・ハンの御陵（アリシャー・タブリージ建築者、1305-1309）がガザン・ハンの御陵の建築的な原則で作られたもっとも見事な建物である。イリハニド朝の新しい都—スルタニイエで建設された陵が第一にその大きなサイズで目立つ。クーポルの内直径が24,5メートルであり、高さが52メートルであった。オルジャイトウ・ハンの御陵の空間容積構造もとても素晴らしかった。八角形のプリズム型体で作られた大きな尖鋭クーポルの周囲の洗練されたミナレットはその唯一さを強調している。多数のミナレットがある建設構造がイスラム圏の建築で新しい考え方であった。

また、技術的な面に於いてはオルジャイトウ・ハンの御陵は世界建築遺産の類をみない建物であった。フランスの研究0. シュアジ（19世紀）をはじめ、世界建築術遺産に関する研究の著者らがオルジャイトウ・ハン陵の建築様式の構成に言及していた。建築デコールの見解からみれば、オルジャイトウ・ハン陵が当時の「百科事典」であった。クラシックな建築物を作ると同



様にアリシャー・タブリージ氏が和の原則、深い理解と繊細なリズムに従っていた。

オルジャイトウ・ハンの御陵が世界建築術にどうように影響したかということ、テュルケスタンでのティムリド朝のも、インドでのムガル朝のも、アフガニスタンでのアフメド・シャー・ドゥラニ（カンダガル、18世紀）の御陵も例として取り上げられる。イリハニド朝時代のアゼルバイジャン建築術の世界的なレベ

ルの最も主要な指標は、アリシャー・タブリージ氏がトルコでのサリミヤ・モスク（コジャ・シナン、1569-1575）の建設及びフィレンツェでのサンタ・マリアデリヤ・フィオレ教会（F.ブルネレスキ、1418-1419）へ影響をもたらしたのが明らかである。

サファヴィー朝の神政国は、建築記念碑の発展に最も影響を与えた国であった。サファヴィー朝の統治者らはシーア派のイマームや祖先や著

モミネ・ハトゥン陵、
12世紀



名な宗教家の墓の上に陵を建てていた。それらの空間的な構想に於いて最も重要な点なのは、それらを収益性の高参拝地域に変えさせる考え方だった。セリジユク朝のダイナミックな塔陵の形に関しては、英雄的精神が感じられる一方で、サファヴィー朝の空間容積構造に関しては隠遁性及びスーフィ教が主要な特徴であった。サファヴィー朝の記念碑の設計の基礎にはダイナミックな「八」が含まれていた。4つの横線と4つの縦線が交差することで9つの正方形（一つの中央のと8つ側の正方形）ができていた。象徴的にこのようなスキームがサファヴィー朝の陵の類型は天国の園の形を連想していた。サファヴィー朝の陵の形のコンセプト、意義深い象徴、特別な建築魅力的さ、完全で効果的な技術的な構造がアゼルバイジャン国外に影

響を普及するようになったことに原因した。それは、とりわけ、シーア派が主要な国々で感じられていた。このような陵の類型は基本的にイランとイラクで一般的である。しかし、サファヴィー朝の陵の建築術スタイルがインドでのムガル朝の建設物に於いて絶頂時に至ったのである。タブリーズの建設流の教え子であるアガ・ミルザ・ギヤスがフマユン陵を建設するにあたってサファヴィー朝型を引き続けた。その後、その陵はタージ・マハルの原型となったのである。

シーア派のイマームの陵のクーポルを金で覆うという考え方は、サファヴィー朝のシャー、タフマシブ1世の考え方である。クーポルを太陽と連想させるのがその考え方の重要なポイントである。金クーポルとクズルバシュのターバン（サファヴィーの帽子）

の間には意義と形態の統一性がある。現在、金クーポルがイランとイラクの領域で残っている。

イリハニド朝の時代は、また宮殿の建築発展と記念されている。首都や統治者らが休息するところに於いてたくさんの宮殿複合体が建てられた。その中でシーズでのアバガ・ハンやシャンプ宮殿・ガザンでのアディリヤ宮殿が有名である。それらは、対称構造を持っており、中央にクーポル型の接待室があり、それに横方向の空間がついていた。ホールの対照的な線に於いて統治者のために寝床が置かれていた。入口は、ベランダのように構想され、大きなプールへ出ていた。その後、このような宮殿はもっとも発展し、タブリーズで中央クーポル型室や角形の部屋のある宮殿総体が変わった。ヘシト・ベヒシトという有名な宮殿総

体がまさにこのようにできた。中央アジアのに於けるティムリド朝の宮殿や、イラクでのサファヴィー朝の宮殿（ヘシト・ベヒシト宮殿、イスファガン市、16世紀）や、チニリ・コシク宮殿（イスタンブール、15世紀）の設計基礎にはアバガ・ハン宮殿の建築原則が入っていた。このような建築モデルの普及の主な理由として、機能的に便利で魅力的な空間設計決定、また国際文化関係の迅速な発展が考えられる。

現在に至って保存されてきたアゼルバイジャンの宮殿総体として、どの見解からみてもシルバンシャー宮殿が優位性を持っている。その宮殿の主要な部分が15世紀—シルバンシャー朝の最盛期に建設された。その宮殿総体は、シルバン建設流ばかりか、アゼルバイジャンの石の建築の最良の例である。シルバンシャー宮殿は、都市のもっと高いところにて建てられた。その建設物は、まず複雑な地形に位置し、機能・構想に応じる適当な見本である。総体の建物は、宮殿アンサンブルであり、様々な機能を果たしているにもかかわらず、それほど大きいものではない。しかし、それと同時に、それぞれの建物は—宮殿、モスク、ハマム、陵—研削術の何世紀もの典型的で、洗練された例である。それらは互いにでも地形とでもよく調和している。

シルバンシャー宮殿への影響力の地域を定めるのが困難である。が、次のポイントを強調しておきたい。19、20世紀の接合点において、バ

クーは、石油が豊富であることで全世界を驚かし、フランス人のアンリ・アティエ氏がシルバンシャー宮殿を見た時に、「なぜ石油油田の噂がこの歴史的な建物の噂より勝るのだろうか」と述べたという。シルバンシャー宮殿のアンサンブルが実に専門家にとっての芸術の著しい経験となっている。

フラク・ハンの統治時代の最も荘重な建築物は、天才天文学者のナスィールッディーン・トゥーサー氏の指導



グディ・ハトゥン陵、14世紀、ナヒチェバン

の下で1259年に構築されたマラガ市での天文台であろう。中世期の最大な天文台総体はマラガ市の高地にある。それは、大きな面積(347 x 137メートル)を占めている。総体となる建物は「ギェンバッド」(クーポール)を中心にできて

いる。マラガ天文台は、ただトゥーサー氏の指導の下での研究のみならず、専門的な建築基準法でも非常に有名になった。14、15世紀の著名な数学者、天文学者であるキヤサッディン・カシ氏がその父親宛の手紙でサマルケンドでのウルクベク天文台がマラガ天文台に基づいて建設されたと書いている。

アゼルバイジャンの建築物は、その技術上の課題の専門的で高いレベルの解決法策でも研究者の注目を集めている。

近東建築術の多くの研究者は、アゼルバイジャンが本地域の主要な被覆型である二層のクーポール型の出現地であると指摘している。

アゼルバイジャンの工手が様々な時代に於いて建築デコールの流行を与えていた。また、それは、イスラム建築の主要な部門となった記念碑書画にも関係させられるだろう。アゼルバイジャンの建築者の腕前明らかにするもう一つの事実として、彼らは中世期において色々な国での建設事業に積極的に関わっていたことが挙げられる。その地理は、ベルケ（タタルスタン）からカイロまで、デリーからサラエヴォまで広がる。近東の主な中心地でありつつ、アゼルバイジャンは中世に於いてイスラム界の建築発展に重要な役割を果たした。✿